

インタビュー

私はこう見る

〈上〉



水揚げの劇的回復が見込まない中、現状に合わせた操業体制への移行は急務だ。併せて、漁業者自身が不漁の原因究明を進めることも、持続的な漁のためには不可欠と言える。短期的な方針ではなく、将来のサクラエビ漁のあるべき姿を模索すべきだ。一線の漁師の考えは――。

原 剛 由比港漁協専務 県桜えび漁業組合副組合長



はら・つよし 2月に副組合長、3月に専務に就任。漁師歴30年以上のベテランで第一大政丸船主。58歳。

「最大の目標は、昨年秋季と同じく資源の回復だった。『取り過ぎてはいけない』と漁師も注意を払い、由比港から出漁したのは数回で過剰な水揚げを行う操業体制ではなかった。それでも、85・3tという水揚げは想像以上に厳しかった。漁期を通して魚群も焼津沖や大井川沖に限られ、禁漁区にした富士川沖などの産卵場の資源状況も良くなかった」

「春漁を振り返って。『最大の目標は、昨年秋季と同じく資源の回復だった。』取り過ぎてはいけない」と漁師も注意を払い、由比港から出漁したのは数回で過剰な水揚げを行う操業体制ではなかった。それでも、85・3tという水揚げは想像以上に厳しかった。漁期を通して魚群も焼津沖や大井川沖に限られ、禁漁区にした富士川沖などの産卵場の資源状況も良くなかった」

「最大の目標は、昨年秋季と同じく資源の回復だった。取り過ぎてはいけない」と漁師も注意を払い、由比港から出漁したのは数回で過剰な水揚げを行う操業体制ではなかった。それでも、85・3tという水揚げは想像以上に厳しかった。漁期を通して魚群も焼津沖や大井川沖に限られ、禁漁区にした富士川沖などの産卵場の資源状況も良くなかった」

現状に合わせ操業移行

「最大の目標は、昨年秋季と同じく資源の回復だった。取り過ぎてはいけない」と漁師も注意を払い、由比港から出漁したのは数回で過剰な水揚げを行う操業体制ではなかった。それでも、85・3tという水揚げは想像以上に厳しかった。漁期を通して魚群も焼津沖や大井川沖に限られ、禁漁区にした富士川沖などの産卵場の資源状況も良くなかった」

「最大の目標は、昨年秋季と同じく資源の回復だった。取り過ぎてはいけない」と漁師も注意を払い、由比港から出漁したのは数回で過剰な水揚げを行う操業体制ではなかった。それでも、85・3tという水揚げは想像以上に厳しかった。漁期を通して魚群も焼津沖や大井川沖に限られ、禁漁区にした富士川沖などの産卵場の資源状況も良くなかった」

「最大の目標は、昨年秋季と同じく資源の回復だった。取り過ぎてはいけない」と漁師も注意を払い、由比港から出漁したのは数回で過剰な水揚げを行う操業体制ではなかった。それでも、85・3tという水揚げは想像以上に厳しかった。漁期を通して魚群も焼津沖や大井川沖に限られ、禁漁区にした富士川沖などの産卵場の資源状況も良くなかった」

インタビュー

私はこう見る

〈中〉



サクラエビに頼らず新たな商品展開を模索する加工業者が出てきた。組合としても、新たな取り組みを後押ししたり、組合員同士で知恵を絞って地域経済を活性化したりする方策が必要となっている。漁業者との中長期的な視点での議論も急務。市場や消費者に近い加工業者に聞いた。

池田 照夫 県桜海老加工組合
連合会会長



いけだ・てるお 2017年7月から現職。静岡市清水区由比地区で戦後から続くサクラエビの加工業「米屋本店」代表。72歳。

「春漁は厳しい商いだったの声を多く。われわれは自主規制の中で最大限(サクラエビ)を取ってもらうことを求めている。漁業者は厳しい規制の中でよくやってくれたと思う。漁期中、群れが薄くて深刻な状況と聞いていたが、地元へ供給できる数量は何とか確保できた。昨年秋漁の水揚げがゼロだったため、春漁で少しでも取れ

漁師と建設的議論期待

て久しぶりに地元の飲食店にお客が来てくれて安心した。初競りで10万円(水揚げ時の基準の15%当たり)だったのは想定内。昨年の春漁終了時の取引値が8万円だったし、秋漁では水揚げがなかったの。しかし、

日どうなるか分からない』と仲買人たちも焦っていた。1、2年、今の状況が続くと分かれば、仲買人たちも落ち着いて計画を立てられるかもしれないが、漁の先行きが見通せないことが一番の不安材料

交換ができる環境が生まれてきた。今後情報共有を深め、公の場で本音を言い合って建設的な議論が行われることを期待したい」

「組合員数の減少には危機感を持っている。水揚げがなければ加工業者の収入は減り、当然、組合の運営も厳しくなっていく。今後は厳しい状況で組合の運営をいかに行うかが課題だ。行政も金融支援をしてきているが、結局借金するところになってしまっているので、腰の業者が多い。資源が回復するまで加工業者の体力を維持するためにも、積極的に支援を活用するよう組合員に呼び掛けたい。7月に加工組合連合会の役員改選が行われる。現役員よりも若い世代にバトンタッチすることになる。苦しい現状だが新しい考えを取り入れて、苦境を乗り越えてほしい」

「大井川では業者が組合を脱退。先細り感がある」(サクラエビ異変「取材班」)

その後も高騰し続け、14万円台という高値になってしまったことは異常事態だった

「不漁の影響は。地域経済に大きく影響している。飲食店には出回ったかもしれないが、加工業者全員がサクラエビを確保できたわけではない。1年先の取引を見据えて動いている加工業者もいる。『明

「漁業者との協力は。こうした不安を解消するためにも漁業者と中長期的な漁の在り方についても意見を交わすことが必要だ。これまで加工業者は漁業者の決定に対し受け身の立場だった。1月から始めた漁業者や加工業者、有識者らが集まる情報連絡会で有意義な議論や意見

のでは。

インタビュー

私はこう見る

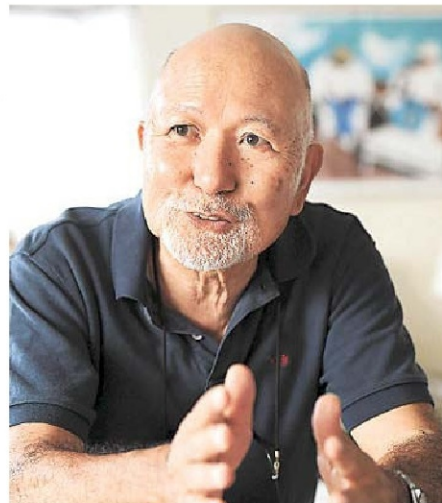
< 下 >



1894(明治27)年に
富士川河口でアジの夜引き
船が偶然、大量のサクラエ
ビを引き上げて以降、地元
に富をもたらしてきた「駿
河湾の宝石」。一方、生態
の解明や、駿河湾の環境テ
ーマは今も不十分のまま
だ。すぐには成果が上がら
ない基礎的研究の充実こそ

大森 信

東京海洋大名誉教授



おおもり・まこと 東京海洋大名誉教授。「プール制」を駿河湾全体に広げることも関わった。81歳。

漁師自身で生態把握を

にするのがそれほど重要な
のか。
「そうだ。駿河湾内の海
況もこれには関係してい
る。初夏、サクラエビは湾
奥の富士川沖で産卵する習
性があるが、湾奥には時計
回りの沿岸流が形成される
ことが知られている。沿岸
流により幼生は湾内にとど
まって成長しやすくなっ

保護のため理にかなう」
漁師がすべきことは、
「漁獲規制だけではなく、
産卵のピークがいつになっ
ているかの調査を漁師自ら
が行うべき。産卵数と産卵
量があるいは『アタマグ
ロ』の出現割合を休漁期間
中も継続調査していくこと
で、産卵のピークがどの時
期に来ているかが分かる。

としてほしい」
今後駿河湾サクラエビ
漁はどうあるべきか。
「漁師たちが自主規制を
行ったことで、静岡の特産
品であるサクラエビの資源
量が減少し、エビが育つ駿
河湾の環境が劣化している
ことに人々が気付いたこと
は意義深かった。不漁の原
因は取り過ぎと駿河湾の環
境劣化と考える。県は沿岸
水域の栄養塩やプランクト
ンなどの、すぐに研究成果
につながる基礎的な項
目についても観測網を敷
き、継続的な調査をするべ
きだ。サクラエビ漁業は、
予見できる将来において、
今ある資源のみで生き延び
るしかないことは漁業者に
明白だ。賢い資源管理によ
り漁獲量の回復はできると
期待したい」

不漁解決の第一歩とサクラ
エビの研究者は提言する。
「春漁を振り返って。
「自主規制は資源保護策
として評価できる。ただ3
〜5年間は続けることが必
要。現状、5〜11月に見ら
れる産卵のピークは後ろに
ずれてしまっていると思わ
れる。長年春漁で産卵前の
エビを取り過ぎた結果だ。
これが不漁の一因と考えら
れる。5〜7月に産まれた
卵は産卵後期の卵より大き

く栄養に富む。また、エビ
の幼生の餌になるプランク
トンが豊富なのも同じ時期
だ。資源回復のためには初
夏の、生残率が最も高い産
卵前期に産卵するエビの数
を確保し、産卵数を増やす
のが重要だ」
「産卵ピークを5〜7月

いる。生残率も高いと思わ
れる。産卵後期になると、
エビは秋漁の漁場となる焼
津・大井川沖に移動する
が、そこで産まれた幼生は
湾外に運び去られてしま
うケースが多いと思われる。
5〜7月にピークを迎えら
れるようにすることは資源

『休漁したら、あるいはこ
こでエビを取らなかつた
ら、産卵のピークはこんな
ふうになるのか』というこ
とを実感してほしい。県の
調査船を待っているのでは
なく、地元の漁師が船を出
せば毎日でも調べられる。
生態についてももっと知ろう

「サクラエビ異変」取材班